

協同労働・よい仕事研究交流全国集会 2022 報告

—労働者協同組合法第1条(目的)を体現する—

2022年3/5、3/6に開催した「協同労働・よい仕事研究交流全国集会」は労協連会議室とオンラインでのハイブリッドで開催しました(全体会は一般参加者120名を含む600人以上、分散会は500名以上の参加。オンライン参加者では、事業所に集まって参加する仲間もあり、正確な数は把握できず)。

集会では2021年度の事業所の「よい仕事」の成果や課題を振り返り、報告し、展望するのはもちろんのこと、2022年10月に労働者協同組合法が施行されるなかで、労協法第1条(目的)を体現することをテーマに開催しました。

従来の集会名は「全国よい仕事研究交流集会」でしたが、昨年度から「協同労働よい仕事研究交流全国集会」に変わり、今回特集する集会名は「協同労働・よい仕事研究交流全国集会」です。法施行時代により「協同労働」「よい仕事」の価値や可能性を深く研究し、広く地域社会に周知・認知され、「持続可能な地域社会づくり」、「多様な人たちは働く職場づくり」、「地域に必要な仕事づくり」を考える集会となりました。

全体会では、座談会とパネルディスカッションを中心に展開され、感想文からも多くの学びがありました。

座談会では、気候危機や環境問題の現実を直視する場となり、自分事としてこの現実をどのように変えていくのかなど、気候危機や環境問題が労働者協同組合の実践テーマと遠い位置にあるのではなく、持続可能な社会をつくるために「知ることから始める」アクションを考える入口になったのではないのでしょうか。

パネルディスカッションでは、現場の成功事例だけでなく、課題や問題を抱えながらも仲間同士が協同し、克服しているプロセスが物語として紹介され、参加者の思いを奮い立たせ、自分の事業所の今後のあり方を考える人が多かったように思います。労協法第1条を体現する意味で、地域に開かれた存在としての労働者協同組合のあり方が問われた場になりました。

分散会では、40分散会(2つの特別分科会含む)で開催しました。私を知る限り、今までのワーカーズコープが主催する全国会議・集会のなかで過去最大の分散会数でした。分散会でコメンテーターを務めた40名のうち、36名からコメントを寄せていただきました

(第28分散会にご参加いただいた前田健喜さんは巻頭言を執筆)。コメントでは、各分散会の報告から協同労働・よい仕事の意味を探究し、社会に広めていくヒントをいただいたと考えています。

紙幅の関係があるため、一部コメントのタイトルのみを抜粋します。

- ・「人は幸せになるために働くんだと…」(第2特別分科会中西大輔)
- ・「ゴミ屋敷の福祉」(第4分散会里見喜久夫)
- ・「よい仕事」をつくるにはプロセスがある(第6分散会北出順子)
- ・「あいだの創出」としての連帯(第7分散会香川秀太)
- ・「×(カケル)」ことで、地域に新たな価値を生み出す(第9分散会斉藤弥生)
- ・「社会づくりの源泉としてのニーズ/ニーズが受け止められる職場」(第17分散会南出吉祥)
- ・『『生活と仕事の結合』と『熟議民主主義を越えた発達民主主義』(第18分散会浅野慎一)
- ・「働き方のニューノーマルとしての協同労働」(第19分散会下村幸仁)
- ・「長く協同することの要件(第25分散会走井洋一)
- ・「順調な苦勞と良質な失敗を重ねる『よい仕事』」(第32分散会丹羽健司)
- ・「地域づくり事業団への挑戦」(第40分散会宮崎隆志)

分散会では少人数参加であったため、一人ひとりの思いが語られる場所となり、日常的な悩み・苦勞・展望等の相談が交流されました。そのなかでコメンテーターの視点から生み出されたコメントは、労働者協同組合の組合員が元気になることもあり、これから労働者協同組合や協同労働を志向したい人にとっては、労働者協同組合の働き方である協同労働による「よい仕事」の魅力・可能性・課題等も考える場になりました。

本誌の役割として、「記録」として残すとともに、「職場づくり」「つながりづくり」に活かしていただきたいと考えています。

具体的には団会議等で「自分たちにとっての『協同労働』・『よい仕事』を深めるときの資料」、「何か困ったときに他の事業所とつながるきっかけにする」などです。第24分散会のコメンテーターの菰田レエ也さんは、集会在縁で早速、ワーカーズコープちばやセンター事業団鳥取の現場とつながり、交流が生まれています。集会名に「研究」が入っていますが、この集会だけで研究をするのではなく、日常的に、研究者と現場事業所の組合員が共同研究するきっかけを協同総合研究所ではつくっていきます。

社会が持続不可能な社会に向かっているなかで、「よい仕事」「協同労働」が、持続可能な社会をつくるための一つの重要なキーワードになってきていると考えています。その「よい仕事」「協同労働」を実践から探究する1冊としてご活用いただきたいと思います。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)